

第2章 情報—中高生の職業情報入手の実態と職業情報ツールの効果

1. 学校段階のキャリア形成支援と職業情報

本節では、学校段階のキャリア形成支援における職業情報について検討する。

学校段階のキャリア形成支援における「情報」は、特定の職業や大学・専門学校など、現実の具体的な進路先の情報と捉えられることが多い。したがって、生徒が具体的な進路選択肢を考慮する段階で、生徒にとって必要な情報を提供すれば良いと考えられがちである。そのため、学校段階のキャリア形成支援における職業情報は、現実の進路選択が行われる前の段階では、あまり重視されない場合がある。

しかし、学校段階の若者に対するキャリア形成支援では、「情報」は特に重要である。その理由として、第一に、中高生段階の若者にとって大人の職業社会は未だ経験がないということがある。そのため、将来の職業に向けた教育的な介入を行おうとすれば、どうしても職業社会に関する情報提供が基礎となる。また、第二に、中高生段階の生徒が将来について考えを巡らせるにしても、そのために自己理解を深めるにしても、その前提として、何からの形で考慮材料となる職業社会に関する基本的な情報は若者の頭の中に入っている必要がある。そうした将来に向けた計画や構想の基盤となる最低限の情報は学校段階のキャリア形成支援の中で提供しておく必要がある。第三に、そのような基本的な職業情報を提供しないままに学校段階の若者に将来の職業やキャリアを考えさせることは、全く知識のない中で何かを考えなければならないという状態に置くということであり、その過程で、偏った職業に対する見方・考え方で進路を選ぶということになりかねない。結果的に、若者は現実の職業世界では容易に実現し得ない困難な進路に向けて進んでいくこともあるであろう。

このように、学校段階のキャリア形成支援における「情報」は、現実の進路選択にあたっての具体的な進路先に関する情報のみならず、それ以前の将来の職業や進路を考える上での基盤となる情報を与えるという意味を含む。いわば中高生の職業知識の基盤を形作るために、様々な形で職業情報を生徒に提供する必要がある。また、公的機関としては、こうした職業知識の基盤を形成するための環境を整備する必要がある。職業情報ツールの研究開発を公的機関で行い、提供する意義もそうした点に求められるであろう。

以上のような観点からすれば、学校段階のキャリア形成支援では、①生徒が日常生活の中でどのような形で将来の職業やキャリアに関する情報を入手しているのか、それに対して、②どのような形で学校段階のキャリア形成支援の中で職業やキャリアに関する情報を付与する必要があるのか、また、③学校段階のキャリア形成支援で提供される職業情報を生徒はどのように受け止め、生徒にどのような影響があるのかといった論点について、基礎的な基盤データを継続的に収集しておく必要がある。

以上の問題意識に基づいて、本章では、学校段階のキャリア形成支援における職業情報の重要性およびそのための指導・支援の重要性について検討を行うこととした。

検討にあたって、本章では、従来、当機構で、職業情報を提供するためのキャリアガイダンスツールを研究開発するにあたって、予備的に収集したデータを集約し、その中から学校段階のキャリア形成支援に有益な知見を得るという手法を用いる。以下に続く3つの節では、それぞれ以下の3つの調査データを用いる。

[第2節] 中高調査（質問紙調査）2000年度実施

東京都近郊および仙台市近郊の中学生2,021名、高校生2,378名の計4,399名。高校調査は進路先が就職・進学比率が半々の学校に依頼することとし、結果的に東京近郊の普通高校6校、工業高校2校、農業高校1校、商業高校1校の計10校、仙台近郊の普通高校1校で調査を実施した。中学校・高校ともに調査票を発送し、授業時間内で実施後、返送してもらった。

[第3節] 中学校調査①（モニター実験調査）2001年度実施

東京都内区立T中学校1年生（3クラス）106名（男子・女子各53名）。2学期に実施する職場訪問学習にあたって職業を事前に調べるという名目で職業ハンドブックOHBYを使用し、使用后、OHBY使用後の感想および進路意識全般に関する質問紙調査を実施した。

[第4節および第5節] 中学校調査②（モニター実験調査）2001年度実施

東京都内市立M中学校2年生（3クラス）197名（男子103名、女子92名、不明2名）。職業ハンドブックOHBYの使用前と使用後の2回、調査を実施した。授業中、OHBY使用前に事前質問紙に回答してもらい、OHBYを用いた進路学習を行った。学習後、事後質問紙に回答してもらった。

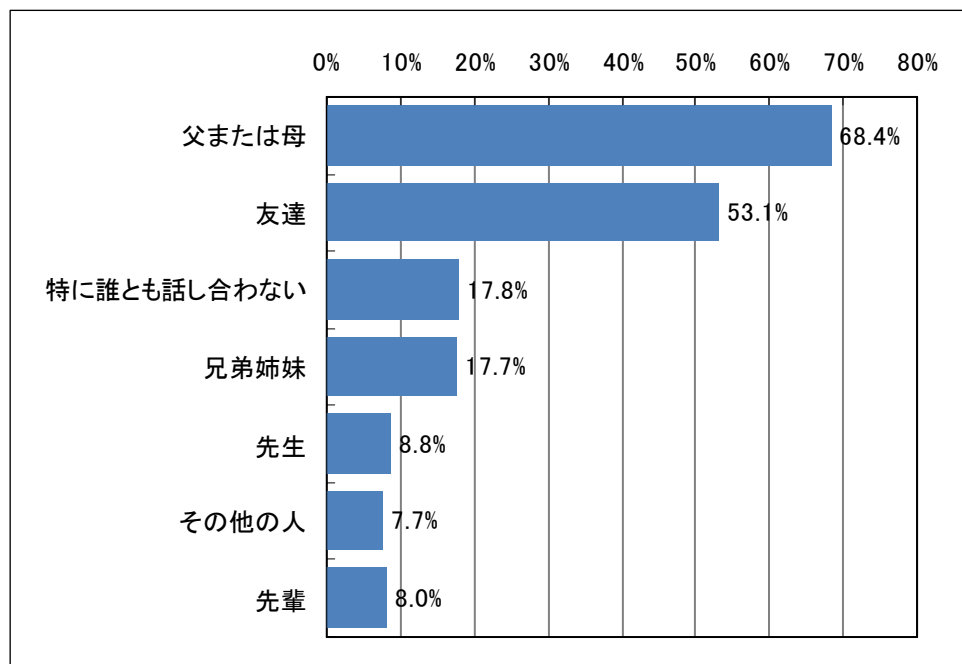
2. 中高生における職業情報入手の実態

（1）全般的な傾向

まず、一般に中高生が誰からどのような形で職業情報を入手しているのかを、大規模な調査データから検討する。本節では、2000年前後にとられた中高生4,399名のデータを再分析することによって、中高生の職業情報入手の実態を把握することとする。データ収集の時期は若干古いが、大きな時代変化はないものとして検討を行った。

図表2-1は、「あなたはふだん、将来の職業について誰と話し合いますか」という設問に対する回答結果である。「父または母」と回答する者が68.4%と最も多く、次に「友達」が53.1%と続いている。基本的に、両親または友達という身近な存在と将来の職業について話している。また、「特に誰とも話し合わない」が17.8%となっており、約2割弱の中高生が将来の職業について誰とも話し合っていないことが注目される。

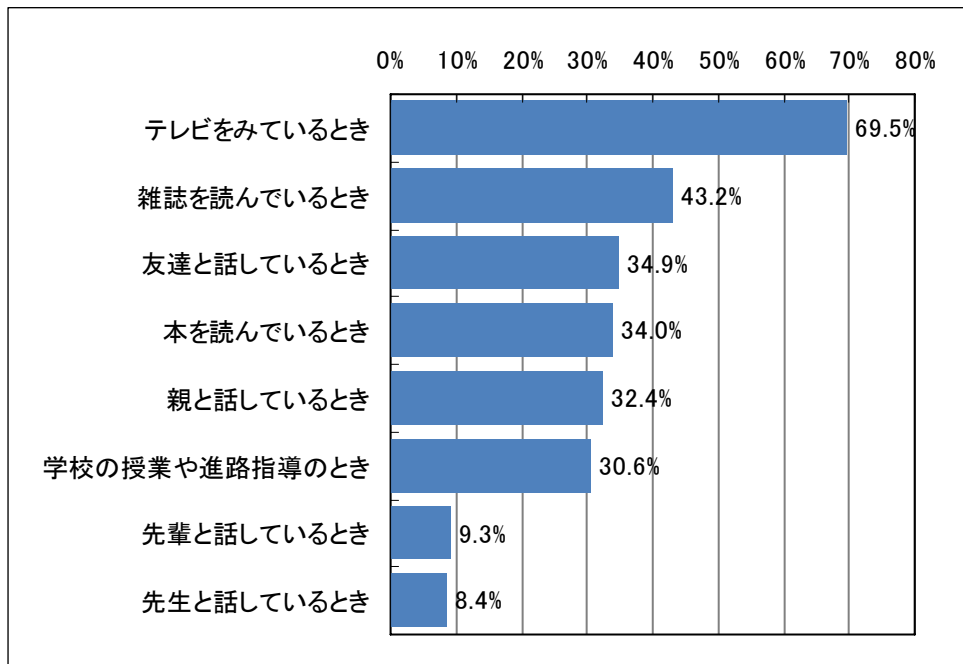
図表2-1 「あなたはふだん、将来の職業について誰と話し合いますか」に対する回答結果
(複数回答)



なお、「将来の職業について話し合う相手」が、必ずしも有益な職業情報の入手先となっていない可能性などもあり、本調査結果にはいくつかの解釈が考えられるが、職業に関する十分な知識のない中高生段階の若者が将来の職業について話し合う際には、少なからず職業に関する何らかの情報のやりとりが含まれると考え、職業情報の入手先として解釈を行った。また、ここで言う「先輩」には学校の先輩、部活の先輩など様々な種類の先輩が含まれるが、ここでは大づかみに本人より少し年上の若者という意味で解釈を行った。どちらの点についても、より深い議論にあたっては、さらに詳細な調査、検討が望まれる。

図表2-2は、「気になっている職業のことを知ったり、新たな職業について知ったりするのは、どんなときですか」という設問に対する回答結果である。「テレビをみているとき」が69.5%と最も多い回答であった。次いで「雑誌を読んでいるとき」「友達と話しているとき」「本を読んでいるとき」「学校の授業や進路指導のとき」が3～4割と続いていた。

図表2-2 「気になっている職業のことを知ったり、新たな職業について知ったりするのは、
どんなときですか」に対する回答結果(複数回答)



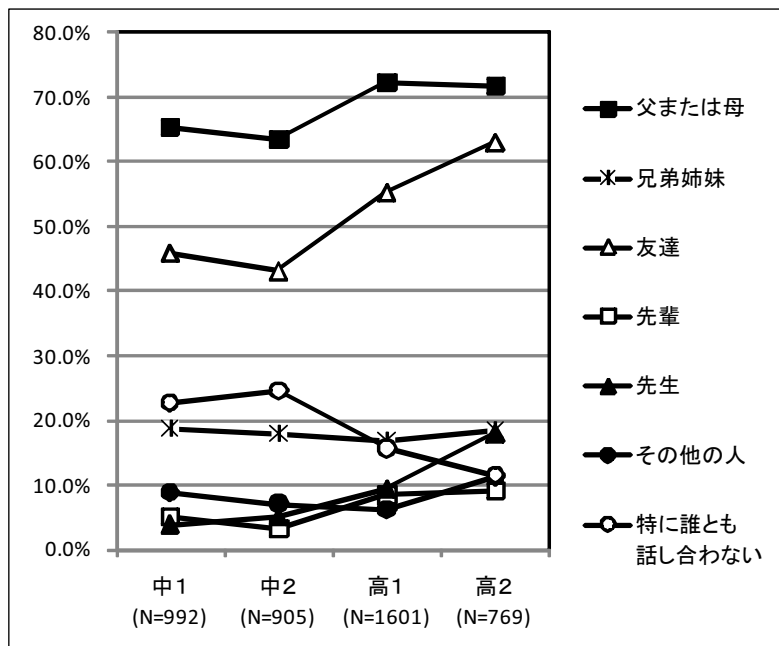
以上の結果から、中高生が、①将来について話し合う相手は両親や友達であり、②具体的な職業について知る機会としてはテレビや雑誌・本といった情報媒体、または友達・親といった身近な人、さらには学校の授業などがあると整理される。

中高生段階の主たる職業情報の入手先である両親や友達などの身近な存在が、社会に存在する様々な職業についてバランスよく知識を持っているとは限らない。とくに友達どうしで話し合う場合には、職業についてよく知らない者どうしで話し合うために、行き交う情報内容は歪んでいたり、不正確であったりすることが考えられる。これは、中高生が具体的な職業情報の入手先として活用しているテレビや雑誌といった情報メディアでも同様のことが言え、メディアの側で取り上げたい職業または取り上げざるを得ない職業以外は、バランスを欠くことが考えられる。

(2) 学校段階および学年による違い

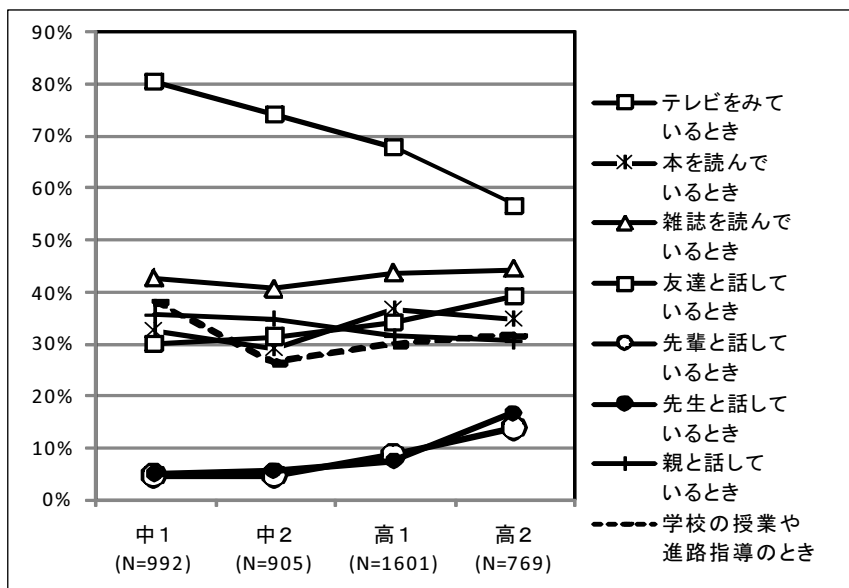
ただし、こうした職業情報の入手先の選好は、学校段階および学年によって異なることが考えられるので、図表2-3および図表2-4には、中学校・高校の各学年別の結果を示した。なお中学校・高校ともに調査実施の都合上、3年生が欠損しているため、1～2年生のデータのみとなっている。

図表2-3 「あなたはふだん、将来の職業について誰と話し合いますか」に対する回答結果の学校段階・学年による違い



図表2-3から、学年があがるにしたがって「父または母」「友達」「先生」の割合が高まること示される。一方で「特に誰とも話し合わない」の割合が低くなっている。こうした結果から、中学生から高校生に至る学年があがる過程で、両親や友達、教員といったより身近な存在が職業情報の入手先として活用されていることがうかがえる。

図表2-4 「気になっている職業のことを知ったり、新たな職業について知ったりするのは、どんなときですか」に対する回答結果の学校段階・学年による違い



また、図表 2-4 からは、職業情報の入手先として「テレビをみているとき」の割合が低くなり、「先生と話しているとき」「先輩とはなしているとき」の割合が高くなっている。テレビなどのマスメディアの影響が中学生から高校生になるにつれて極端に低くなることが分かる。さらに、この図表からは、教員の重要性が推測される結果となった。先輩から職業情報を得るとい回答の割合の高まりもあわせて考えると、学校の中で職業情報が入手される割合が高まると言うことができる。

(3) 希望進路による違い

図表 2-5 および図表 2-6 は、将来の職業について誰と話し合うかを希望進路別にみたものである。図表 2-5 は中学生の結果であるが、進路未定の生徒では「父または母」「兄弟姉妹」「友達」と回答する割合が低く、「特に誰とも話し合わない」と回答する割合が高かった。一方、大学進学を希望する生徒では「父または母」との回答が多かった。

図表 2-5 「あなたはふだん、将来の職業について誰と話し合いますか」に対する
回答結果の希望進路による違い(中学生)

	就職 (N=15)	高校まで 進学 (N=745)	大学まで 進学 (N=973)	未定 (N=205)	sig.
父または母	40.0%	64.4%	69.2%	54.6%	**
	-2.09	-0.84	3.34	-3.49	
兄弟姉妹	13.3%	19.2%	20.3%	9.8%	**
	-0.54	0.41	1.83	-3.48	
友達	60.0%	46.7%	45.7%	31.2%	**
	1.20	1.42	0.93	-4.10	
先輩	60.0%	46.7%	45.7%	31.2%	
	1.20	1.42	0.93	-4.10	
先生	0.0%	4.3%	5.7%	3.9%	
	-0.88	-0.98	1.54	-0.70	
その他の人	0.0%	6.4%	9.9%	6.8%	
	-1.16	-2.17	2.77	-0.73	
特に誰とも話し合わない	20.0%	21.9%	21.2%	35.6%	**
	-0.27	-0.90	-1.88	4.55	

** p<.01

※各セル下段は調整済み標準化残差。絶対値が1.96以上の場合に5%水準で有意と解釈される。

図表2-6 「あなたはふだん、将来の職業について誰と話し合いますか」に対する
回答結果の希望進路による違い(高校生)

	就職 (N=517)	短大・ 専門学校 に進学 (N=427)	大学に 進学 (N=1171)	未定 (N=238)	sig.
父または母	68.3% -1.98	78.0% 3.17	74.9% 3.38	52.5% -6.94	**
兄弟姉妹	16.4% -0.58	19.4% 1.29	17.1% -0.28	16.4% -0.39	
友達	50.9% -3.57	62.3% 2.12	59.2% 1.43	57.1% -0.19	**
先輩	10.1% 1.10	8.9% 0.05	8.7% -0.22	6.7% -1.21	
先生	14.9% 2.31	12.2% 0.14	11.8% -0.30	6.3% -2.85	**
その他の人	8.5% 0.54	10.8% 2.39	6.8% -1.99	7.1% -0.48	
特に誰とも話し合わない	16.1% 1.17	8.2% -4.06	14.3% -0.26	23.1% 4.01	**

** p<.01

※各セル下段は調整済み標準化残差。絶対値が1.96以上の場合に5%水準で有意と解釈される。

図表2-6の高校生の結果でもおおむね類似した傾向がみられており、進路未定の生徒では「父または母」「先生」と回答する割合が低く、「特に誰とも話し合わない」と回答する割合が高かった。一方、大学進学を希望する生徒では「父または母」と回答する割合が高かった。その他、就職希望の生徒は「友達」と回答する割合が低く「先生」と回答する割合が高かった。また短大・専門学校希望の生徒は「父または母」「友達」と回答する割合が高く、「特に誰とも話し合わない」と回答する割合が低かった。就職希望は教員からの情報によるもの、短大専門学校は両親・友達からの情報によるものと大まかに考えておくことができると思われる。

図表2-7からは、高校まで進学すると考えている中学生と大学まで進学すると考えている中学生では「本を読んでいるとき」に職業を知ると回答する割合が違うことが示された。また、「親と話しているとき」という回答は大学まで進学を考えている中学生で多く、進路未定の中学生では少なかった。

図表2-7 「気になっている職業のことを知ったり、新たな職業について知ったりするのは、
どんなときですか」に対する回答結果の希望進路による違い(中学生)

	就職 (N=15)	高校まで 進学 (N=745)	大学まで 進学 (N=973)	未定 (N=205)	sig.
テレビをみているとき	73.3%	76.9%	78.7%	74.6%	
本を読んでいるとき	13.3%	27.8%	34.4%	28.3%	**
雑誌を読んでいるとき	26.7%	42.0%	42.3%	39.5%	
友達と話しているとき	40.0%	33.4%	30.6%	24.9%	
先輩と話しているとき	13.3%	4.8%	4.5%	5.9%	
先生と話しているとき	0.0%	5.5%	6.0%	4.9%	
親と話しているとき	26.7%	33.4%	38.7%	26.3%	**
学校の授業や進路指導のとき	33.3%	31.3%	32.2%	30.7%	
	0.14	-0.30	0.46	-0.31	

※各セル下段は調整済み標準化残差。絶対値が1.96以上の場合に5%水準で有意と解釈される。

同じく図表2-8は高校生の結果であるが、希望進路と職業情報の入手先には強い関連がみられた。①就職希望の生徒は「テレビをみているとき」「本を読んでいるとき」という回答が少なく「先輩と話しているとき」「先生と話しているとき」という回答が多い、②短大専門学校希望の生徒は「本を読んでいるとき」「親と話しているとき」という回答が少ない、③大学進学希望の生徒は「テレビを見ているとき」「本を読んでいるとき」「親と話しているとき」という回答が多い、④進路未定の生徒は「テレビを見ているとき」「親と」話しているとき」という回答が多い。これら結果の統一的な解釈は難しいが、概して就職希望の生徒は学校経由の職業情報入手の割合が多く、大学進学希望の生徒ではテレビや本などの情報媒体の影響が特に大きいことが際だった特徴となっていた。

図表2-8 「気になっている職業のことを知ったり、新たな職業について知ったりするのは、
 どんなどきですか」に対する回答結果の希望進路による違い(高校生)

	就職 (N=517)	短大・ 専門学校 に進学 (N=427)	大学に 進学 (N=1171)	未定 (N=238)	sig.
テレビをみているとき	54.2% -5.26	60.0% -1.91	68.4% 4.47	70.6% 2.25	**
本を読んでいるとき	23.2% -6.84	31.1% -2.29	43.6% 7.65	34.9% -0.37	**
雑誌を読んでいるとき	33.5% -5.29	51.8% 3.73	43.4% -0.26	52.5% 2.91	**
友達と話しているとき	34.8% -0.43	36.8% 0.55	35.2% -0.43	37.4% 0.61	
先輩と話しているとき	13.7% 2.84	10.8% 0.30	8.5% -3.03	11.8% 0.74	**
先生と話しているとき	14.5% 3.41	8.7% -1.34	9.8% -1.00	8.0% -1.31	**
親と話しているとき	30.6% -0.26	26.7% -2.14	34.2% 3.27	24.4% -2.34	**
学校の授業や進路指導のとき	30.6% 0.15	32.1% 0.89	29.6% -0.70	29.8% -0.17	

※各セル下段は調整済み標準化残差。絶対値が1.96以上の場合に5%水準で有意と解釈される。

3. 職業情報ツール使用後の自由記述結果の分析

前節までに、中高生の職業情報入手の実態についてみた。その結果、両親や兄弟など身近な存在やテレビなどのメディアから、中高生は職業の情報を多く入手しているようであった。ただし、家族のような身近な存在が必ずしも十分な職業情報をもっているとは限らず、また、テレビなどのメディアも中高生が知っておくべき必要十分な職業情報を提供するとも限らない。そのため、やはり学校段階のキャリア形成支援において十分な職業情報提供を目的とした何らかの介入がなされる必要がある。

本機構ではこうした目的から、学校段階のキャリア形成支援のためのパソコン用CD-ROMソフトである「職業ハンドブックOHBY」を以前から公開している。このソフトは、「現代の主要な430職業について分かりやすく詳しい解説」「豊富な画像やイラストから職業の世界をやさしく学べる」「いろいろな探索メニューから、興味・関心のある職業を調べられる」「簡単なテストで、自分の興味・能力の特性を理解できる」(紹介ホームページ <http://www.hrsys.net/ohby/top/top.htm> より)などを特長としており、「学校での進路指導・カウンセリングやハローワーク・キャリア相談機関で活用することを目的に開発され」、広く活用されている。このソフトは、掲載されている職業タイトル数、職業情報内容の質量ともに国内でも最大水準にあること、様々なコンテンツが含まれており多様な活用が可能であること、中高生を対象として作成されていることなど、現在、学校段階のキャリア形成支援で活用できるCD-ROMソフトとしては高い水準にあるものと考えられている。

図表2-9 職業ハンドブックOHBYの一部



本節では、この職業ハンドブックOHBYを中学生に活用したデータを紹介する。このデータは、東京都T中学校の1年生3クラス106名(男女各53名)を対象として、「2学期に実施する職場訪問学習にあたって職業を事前に調べる」という名目で職業ハンドブックを活用したものである。活用後、CD-ROMを使用した感想をたずねた(なお、ここで紹介するデータの一部は川崎・下村(2001)、下村・吉田・石井(2002)で一部報告された)。

まず、図表2-10には、「このCD-ROMを使ってみて、どんな感想を持ちましたか」という設問に対する自由記述結果を示した。その結果、「(いろいろな職業について)分かった」という内容を記述した者が14.2%(15名/106名)だった。以下、「面白かった」12.3%(13

名/106名)、「分かりやすかった」9.4%(10名/100名)と続いていた。ただし、少数意見として「仕事は大変だと思った」などのネガティブな意見も挙がっており、この種の職業情報ツールを使用するにあたって、どのような場合にネガティブな影響を生徒に与えてしまうのかは、今後、継続して検討するべき課題である。

図表2-10 「このCD-ROMを使ってみて、どんな感想を持ちましたか」という設問に対する自由記述結果(一部)

【分かった】(15) いろんな職業があることがわかった。 自分にあった職業がわかって良かった。 わからなかった職業がわかった。
【面白かった】(13) おもしろくてわかりやすかった。 おもしろそうな仕事があった。 おもしろかった。 自分のあっているしよぎょうがあつておもしろかった。 わかりやすくてすごくおもしろかった
【分かりやすかった】(10) わかりやすい またやってみたい。 とてもわかりやすかった。 わかりやすかった。 わかりやすくておもしろかった。 すごくわかりやすくて楽しかった。
【使いやすいかった】(8) つかいやすい 使いやすくてよかった。またやってみたい！ 使いやすかった。 いろいろ職業のことがたくさんわかり、使いやすいかった。 みやすくて使いやすいと思った
【楽しかった】(7) 楽しくできた 楽しくてまたぜひつかいたい。 まあまあたのしかった 思ったよりたのしかった
【ためになった】(6) いろいろなしごとのことしらべて、とてもやくにたつた。 職業をきめるのにやくだつと思つた 職業をえらぶ手がかりになつた 将来のためになつたと思ふ
【いろんな仕事があると思つた】(5) 知らない職業がたくさんあつてびっくりした いっぱい職業があつた いろんな仕事があるのだなあと思つた
【仕事は大変だと思つた】(3) 自分にならうとしている仕事は大変だと思つた。 仕事に(きゆうりょうの高い)つくのは、大変な気がした。 仕事が大変ということ
【もっとやりたい】(4) もっといろいろとやってみたい もっとやりたかつた。 またやってみたいと思つた。
【ネガティブな意見】(14) あまりわからなかつた やらなければよかつた 自分がやりたい仕事に自分にあつてなかつた。 つまらなかつた 自分がなりたい職業のことがなかつた
【その他】

図2-11には、「自分がみた職業について、どんなことが分かりましたか」という設問に対する自由記述結果を示した。その結果、「職業に就く方法が分かった」という内容を記述した者が15.1%(16名/106名)と多かったが、関連する内容の「職業に就くのは難しい」という回答の者が14.2%(14名/106名)と多かった。ここでも具体的に自分が希望する職業について調べた結果、自分が希望する職業に就くのは難しいこと、仕事内容が「大変そう」であること他、ネガティブな感じ方を自由記述として記している生徒は一定数以上みられた。

図表2-11 「自分がみた職業について、どのようなことが分かりましたか」という設問に対する自由記述結果(一部)

<p>【職業に就く方法が分かった】(16) どうやってなれるかがわかった。 なるためにはどうするかがわかった。 どういうことをしたらいいのかがわかった。 専門学校とかに行っただけの方が仕事などにはいりやすいこと。 高等学校などに行くこと。 しけんがあった 勉強すればはいる めんきょがひつようなのがあった</p>
<p>【職業に就くのは難しい】(14) 職につくのはとてもむずかしい。 職業につくのにたいへんだということがわかった。 どれもなるまでが大変。 そうかんたんにはなれないとおもった。 学校をでないとしょくぎょうにつけない たくさん勉強しないと職業につけないと思った がんばらなきゃいけないと思った。</p>
<p>【どんな仕事か分かった】(14) どんな仕事なのかがわかった。 人にやくたつ仕事が多い ほとんど女の人のがはたらいている。 いろいろな役割が分かった 知らなかったことが分かった。 みんながんばっていることがわかった その会社の一人一人が必要なんだと思った</p>
<p>【仕事は大変そう】(11) 大変そう つらそうなのがあった。 けっこう大変な仕事だと思った 自分が考えていた職業とちがっていてむずかしいことしかなかった けっこうたいへんだと思った どのしごとにもいろいろなひとがいていっしょうけんめいやっているんだなと思った。</p>
<p>【いろいろ】(4) いろいろと関連があること いろんなこと。 いろいろ</p>
<p>【たくさん職業があった】(3) 自分が思っていたより仕事がたくさんあった。 いっぱいしょくぎょうがあった 職業って多いなあ</p>
<p>【ネガティブな意見】(13) なかった。 自分がやりたい職があまりなかった。 もっと職業をしらべたかった よくわからなかった。 やりたい仕事のがのっていなかった。 よくわからない</p>
<p>【その他】(9)</p>

最後に、図表2-12に、「自分のやりたいこと（職業など）について、どんなことを考えましたか」という設問に対する自由記述結果を示した。自分がやりたいことについて、27.4%(29名/100名)が「（勉強などを）がんばらないといけないと思った」といった内容の回答をしており、次に「（仕事を）やりたくなかった」とする回答が14.2%(15名/106名)と多かった。

図表2-12 「自分のやりたいこと(職業など)について、どんなことを考えましたか」という設問に対する自由記述結果(一部)

<p>【がんばらないといけないと思った】(29)</p> <p>なるのはむずかしそう かんたんにかんがえていたけどいきかたがむずかしかった。 がんばって勉強しないとだめなこと がんばって練習したり、学ばないとできない 思っていたよりつらいことがあったり、勉強しないといけないと思いました。 そんなにかんたんには職につけないと思った。 がんばらなきゃできない もっと勉強しないといけない べんきょうをいっぱいする その職業につくのは大変だなと思った。 ただひたすらがんばる がんばろうと思った。 努力しようと思った。 がんばってやろうと思った あきらめないでがんばる</p>
<p>【やりたくなかった】(15)</p> <p>もっとやりたくなかった 早くやってみたいと思った。 とてもその職業につきたいと思った。 ぜったいかなえようと思った おもしろそうと思った もときょうみをもった やっぱりお客さんによるこんでもらえる仕事をやってみたいと思った。 向いている仕事だと思った。</p>
<p>【考えていない】(14)</p> <p>まだきめていない。 やりたいことがない やりたい仕事が見つからなかった。 まだわかっていないからこれから考える。 べつに考えてない。 あまり考えてない もう少し考えようと思った</p>
<p>【もっと知りたい】(6)</p> <p>もっと調べてみたい。 よく調べたい。 前よりもっと知りたくなかった。 もっとやりたいことについていろいろ調べてみたい もっとその職業のことを知りたい もっと知りたい</p>
<p>【具体的な職業】(5)</p> <p>ボウリング関係 力仕事がしたい 教員が少しやりたいと思った。 プロ野球選手 とびしよく</p>
<p>【その他】(18)</p>

ここで示したような職業情報ツールに対する中学生の自由記述結果を概観すると、職業情報ツールが生徒に与える影響は必ずしもポジティブなものばかりではなく、生徒にとってネガティブに感じられるものも多分に含まれていることが分かる。つまり、職業情報ツールの効果とは、必ずしも希望職業に向けてよりいっそう動機づけられるとか、それに向けて努力をするといったものだけでなく、むしろ、生徒が希望する職業の実像やその職業に至るまでの現実のプロセスを示し、生徒が事前に思い描いている想像上のイメージにある種のリアリティを与えるものであると位置づけておくことができるであろう。

したがって、一般に漠然と考えられているように、職業情報ツールは動機づけのツールとして有益であるというよりは、むしろ生徒の職業や進路に対する考え方をよりいっそうリアルなものにするという効果を重く考えておくべきであると思われる。このように考えた場合、生徒が希望する職業について「大変そう」「就くのが難しい」「がんばらないといけないと思った」といったような、表面上、ネガティブな感じ方にみえる感想も必ずしも否定的に考えるべきものではなく、むしろ、生徒の漠然としたイメージがより現実的なものに近づいているのだと考えるべきであることが示される。

4. 職業情報ツール使用後の感想項目の分析

(1) 職業情報ツール使用後の感想の性別による違い

本節で報告するデータは、引き続き前節の職業ハンドブックOHBYを使用したものであるが、中学2年生6クラス（男子103名、女子92名、不明2名計197名）を対象に、職業ハンドブックOHBYの使用前後でデータを収集した。中学校の授業時間に、生徒にまず実験前質問紙に回答してもらい、職業ハンドブックOHBYの使用方法を説明した後、職業ハンドブックOHBYを用いた進路学習を行った。

職業ハンドブックOHBY使用前後の効果測定を行うために、中学生の進路自己効力感を「進学」「就職」「人生」の3側面から測定する坂柳・清水(1990)の「進路課題自信尺度(12項目)」を用いた。他に、職業ハンドブックOHBY使用前の質問紙では、性別、職業興味、得意科目、早く大人になって仕事をしたいと思うか否かなどをたずねた。職業ハンドブックOHBYの質問紙では、川崎・下村(2001)で使用した「ガイダンス効果を測定する質問項目(35項目)」を用いた。質問項目は「職業理解」「職業構造の理解」「職業特性の理解」「自己理解」「職業と自分との関連(マッチング)についての理解」「職業意識」「勤労観」の7領域(各5項目)で構成されており5件法で回答させた。

本節では、この職業ハンドブックOHBYの使用前後の質問紙調査のデータのうち、使用後の感想を詳しく分析することによって、学校段階のキャリア形成支援における職業情報ツール使用の効果と意義について検討することとした。

図表2-13は、職業情報ツールOHBYを使用後にその感想を測定した35項目である。前節までの分析結果で顕著にみられていた性別による違いを検討するために、男子と女子に

よる平均値の違いを示した。その結果、どの項目でも概して男子よりも女子の方が高かった。もっとも差が大きかったのは「自分の興味・関心がはっきりしてきた」で、以下「職業を選ぶ手がかりが得られた」「興味がある職業と同じ仲間の職業が分かった」と続いていた。ただし、それ以外の質問項目も全て女子の方が値が高かったことから、職業情報ツールの使用にあたっては女子の方が肯定的な反応を示しやすかったといえることが、比較的、頑健な結果として言えるものと思われる。

図表2-13 職業情報ツール使用後の感想の性別による違い

	男子 (N=100)	女子 (N=90)	sig
仕事の世界に対するイメージができた	3.46	3.70	
いろいろな仕事がどのように関連しているかが分かった	3.35	3.71	**
ある仕事の作業内容が分かった	3.57	4.02	**
自分の性格がより良く理解できた	3.21	3.49	
自分の性格とやりたい仕事があるかどうか分かった	3.27	3.44	
職業をうまく選べそうな気がしてきた	3.27	3.63	**
働くことの大切さが分かった	3.52	3.65	
やりたい仕事についてより詳しく分かった	3.13	3.55	
どんな仕事グループがあるのか分かった	3.43	3.62	
ある仕事为社会にどうして必要か分かった	3.12	3.40	
自分の興味・関心がはっきりしてきた	3.20	3.70	**
自分の興味とあった仕事分かった	3.24	3.66	**
職業を選ぶ自信がついた	3.35	3.42	
職業の重要さが分かった	3.46	3.59	
興味がある仕事新たに増えた	3.20	3.46	
身近な職業を整理できた	3.10	3.20	
ある仕事に就くにはどんな人が向くのか分かった	3.24	3.57	
自分の得意な分野(適性)がはっきりしてきた	3.28	3.64	
やりたい仕事に自分が向いているかどうか分かった	3.28	3.55	
改めて将来の職業を考えてみる気になった	3.28	3.66	
何のために働くのかが分かった	3.49	3.73	
仕事の世界の広がり理解できた	3.39	3.60	
興味がある職業と同じ仲間の職業分かった	3.24	3.70	**
ある仕事でどんな人が働いているのか分かった	3.41	3.64	
自分が大切に思うこと(価値観)がはっきりしてきた	3.24	3.62	
やりたい仕事するには何を勉強すればいいか分かった	3.44	3.83	
職業を選ぶ手がかりが得られた	3.33	3.80	**
仕事をするのが何に役立つのか分かった	3.44	3.58	
いろんな仕事の役割分かった	3.41	3.61	
仕事でどんなふうに分類されるのか分かった	3.28	3.59	
ある仕事に就くにはどんな勉強が必要か分かった	3.49	3.91	**
自分の目標がはっきりしてきた	3.19	3.53	
自分の関心のある仕事に就けるかどうか分かった	3.06	3.48	**
職業についてもっと調べたくなった	3.43	3.80	
仕事と世の中の関係分かった	3.13	3.51	**

** p<.01 統計的に有意に値が大きい箇所を太字網掛け下線で強調した。

(2) 職業情報ツール使用後の感想と得意科目、職業興味、その他との関連

図表2-14には、職業情報ツール使用後の感想と得意な科目との関連を示した。もっとも値の大きな相関係数が観察されたのは、「職業をうまく選べそうな気がしてきた」と「音楽」との関連であり($\rho=.27$)、以下「職業をうまく選べそうな気がしてきた」と「国語」($\rho=.26$)、「改めて将来の職業を考えてみる気になった」と「英語」($\rho=.24$)と続いて

いた。全般的に「国語」と「音楽」が得意だと回答した生徒ほど職業情報ツール使用後の感想が肯定的なものであるという結果がみられた。ただし「国語」と「音楽」は統計的に有意に女子の方が得意であると回答した項目でもあり（国語 $t(192,00)=3.05$ $p<.01$ ；音楽 $t(193)=3.31$ $p<.01$ ）、前項でみた性別の影響が強く表れたためであると考察される。

図表2-14 職業情報ツール使用後の感想の得意な科目との関連(順位相関係数)

	体育	国語	数学	理科	技術 家庭 科	英語	美術	音楽	社会
仕事の世界に対するイメージができた	-.08	.12	.01	-.07	.03	.02	.05	.04	.08
いろいろな仕事がどのように関連しているかが分かった	.01	.09	.02	-.06	.00	.11	.05	.17	.08
ある仕事の作業内容が分かった	-.14	.11	.13	.02	.03	.00	.09	.15	.11
自分の性格がより良く理解できた	.14	.12	.11	.03	.01	.11	.17	.23	.00
自分の性格とやりたい仕事があっているかどうか分かった	.04	.13	.13	.08	.07	.08	.05	.15	.09
職業をうまく選べそうな気がしてきた	.07	.26	.08	-.03	.10	.08	.14	.27	.09
働くことの大切さが分かった	.09	.09	-.04	-.10	.12	-.05	.02	.11	.07
やりたい仕事についてより詳しく分かった	-.08	.08	.01	-.01	.03	.04	.02	.06	.00
どんな仕事グループがあるのか分かった	.06	.12	.02	-.03	.03	-.06	-.10	.04	.05
ある仕事が社会にどうして必要か分かった	.07	.15	-.02	-.01	.16	.00	.03	.12	.14
自分の興味・関心をはっきりしてきた	-.05	.17	-.01	-.06	.04	.04	.04	.23	.07
自分の興味とあった仕事に分かった	.02	.16	.06	-.03	.07	.05	.04	.18	.06
職業を選ぶ自信がついた	-.06	.19	.10	-.02	.04	.16	.08	.19	.15
職業の重要さが分かった	-.08	.04	-.06	-.07	-.04	.06	.04	.06	.07
興味がある仕事が新たに増えた	.03	.14	-.05	-.09	.06	.06	.04	.13	.00
身近な職業を整理できた	.07	.15	.05	-.06	.01	.11	.04	.04	.12
ある仕事に就くにはどんな人が向くのか分かった	.08	.15	.04	-.11	.00	.11	.10	.16	.07
自分の得意な分野(適性)をはっきりしてきた	.08	.20	.09	.02	.00	.11	.05	.12	.09
やりたい仕事に自分が向いているかどうか分かった	.04	.12	.07	.06	.17	.06	.07	.21	.06
改めて将来の職業を考えてみる気になった	.03	.15	.08	-.06	-.03	.24	-.01	.14	.08
何のために働くのかが分かった	-.05	.10	-.11	-.16	.08	-.07	.05	.11	.06
仕事の世界の広がり理解できた	.02	.09	.02	-.03	.02	-.04	.02	.17	.17
興味がある職業と同じ仲間の職業が分かった	.04	.08	.02	-.03	.05	.07	.09	.21	.18
ある仕事でどんな人が働いているのか分かった	.02	.20	-.04	-.03	.08	.03	.05	.14	.12
自分が大切に思うこと(価値観)をはっきりしてきた	.08	.10	.07	.01	.02	.13	.10	.22	.14
やりたい仕事をするには何を勉強すればいいか分かった	-.08	.02	-.01	-.08	.00	.04	.05	.15	.05
職業を選ぶ手がかりが得られた	-.03	.09	.11	.05	-.04	.06	.05	.08	.08
仕事をするのが何に役立つのか分かった	.07	.01	.12	.04	-.09	.06	.08	.09	.16
いろんな仕事の役割が分かった	.02	.08	.06	-.06	.03	.05	.06	.16	.12
仕事がどんなふうに分類されるのか分かった	.06	.15	.15	-.02	.04	.01	.06	.11	.14
ある仕事に就くにはどんな勉強が必要か分かった	-.15	.06	.01	-.07	-.02	.06	.05	.10	.09
自分の目標をはっきりしてきた	.05	.15	.08	-.06	.05	.15	.00	.22	.09
自分の関心のある仕事に就けるかどうか分かった	.03	.14	.13	-.02	.10	.11	.08	.20	.05
職業についてもっと調べたくなった	.03	.10	.06	-.01	-.01	.11	-.02	.17	.01
仕事と世の中の関係が分かった	.09	.11	.02	-.04	.05	.11	.02	.12	.11

** $p<.01$ 統計的に有意に値が大きい箇所を太字網掛け下線で強調した。

図表2-15では、職業情報ツール使用後の感想と職業興味との関連を示した。もっとも値の大きな相関係数が観察されたのは、「興味がある仕事が新たに増えた」と「いろいろな人と接する仕事がしたい」との関連であり ($\rho=.37$)、以下「自分の興味・関心をはっきりしてきた」と「いろいろな人と接する仕事がしたい」 ($\rho=.36$)、「自分の性格がより良く理解できた」と「いろいろな人と接する仕事がしたい」 ($\rho=.31$)と続いていた。ただし、図表2-12に示されるとおり、概して「いろいろな人と接する仕事がしたい」と考えている生徒ほど職業情報ツール使用後の感想は肯定的なものであり、対人的な職業興味が高いほど職業情報を提供するタイプのキャリアガイダンスが有効である可能性が考えられる。なお、当然ながらここで測定している職業興味でも性差はみられており、「いろいろな人と接する

仕事がしたい (t(189)=4.43 p<.01)」「絵や音楽の仕事がしたい (t(190)=4.95 p<.01)」など、図表2-15で統計的に有意な相関係数が多くみられた職業興味は特に性差が大きく女子に特徴的な職業興味であることが示されている。そのため、性差がツール使用後の肯定的な感想に間接的に結びついた可能性は考えられる。ただし、図表2-12では、「機械や道具をいろいろ使う仕事したい」「ものを作ったり組み立てる仕事したい」など他にも比較的性差が大きい項目はあり、これらの項目では特に大きな値の相関係数がみられなかったことからすれば、必ずしも性差だけの影響ではないと考察される。

図表2-15 職業情報ツール使用後の感想の職業興味との関連(順位相関係数)

	ものを 作ったり 組み立てる 仕事 が し た い	ものを 考 え た り 調 べ た り す る 事 務 が し た い	計算 機 を 使 う 事 務 が し た い	会社 や 組 織 で ま る ま る と し て く ら い の 事 務 が し た い	絵 や 音 楽 の 仕 事 が し た い	言葉 や 数 字 を 使 う 事 務 が し た い	いろ い ろ な 人 と 接 す る 事 務 が し た い	機 械 や 道 具 を い ろ い ろ 使 う 事 務 が し た い
仕事の世界に対するイメージができた	.12	.01	.09	.07	.08	.03	.10	.03
いろいろな仕事かどのように関連しているかが分かった	.10	.03	.03	.12	.10	.03	.24	.02
ある仕事の作業内容が分かった	.06	.02	.07	-.03	.15	-.02	.22	-.02
自分の性格がより良く理解できた	.07	.03	.05	.01	.19	.04	.31	-.01
自分の性格とやりたい仕事があっているかどうか分かった	.13	.11	.09	-.03	.13	.08	.17	.09
職業をうまく選べそうな気がしてきた	.03	.13	.05	.07	.12	.05	.30	-.06
働くことの大切さが分かった	.04	-.02	.09	.09	.11	.09	.15	.05
やりたい仕事についてより詳しく分かった	.03	.06	.08	.08	.13	.13	.08	-.06
どんな仕事グループがあるのか分かった	.15	.07	.04	.00	-.07	.06	.12	-.08
ある仕事に社会にどうして必要か分かった	.08	.03	.14	.06	.10	.08	.16	.04
自分の興味・関心がはっきりしてきた	.04	.11	.03	.10	.18	.09	.36	-.05
自分の興味とあった仕事分かった	.03	.17	.07	.14	.10	.17	.30	.01
職業を選ぶ自信がついた	-.05	.18	.05	.02	.07	.10	.23	.02
職業の重要さが分かった	.10	.08	-.03	.10	.10	-.03	.14	.06
興味がある仕事に新たに増えた	.07	.04	-.05	.17	.18	-.03	.37	.01
身近な職業を整理できた	.03	.09	.10	.14	.02	.15	.21	-.04
ある仕事に就くにはどんな人が向くのか分かった	-.01	.04	.05	.10	.11	.12	.24	-.06
自分の得意な分野(適性)がはっきりしてきた	.03	.04	.04	.09	.15	.07	.28	-.02
やりたい仕事に自分が向いているかどうか分かった	.08	.01	.00	.05	.20	.03	.23	.00
改めて将来の職業を考えてみる気になった	-.04	.00	.05	.11	.10	.07	.24	-.07
何のために働くのか分かった	-.07	-.05	.03	-.03	.07	.01	.04	.00
仕事の世界の広がり理解できた	-.07	.04	.00	.13	.13	.03	.26	.03
興味がある職業と同じ仲間の職業が分かった	-.12	.07	.00	.13	.19	.10	.27	-.08
ある仕事でどんな人が働いているのか分かった	-.01	-.10	.04	.04	.10	.07	.18	.01
自分が大切に思うこと(価値観)がはっきりしてきた	.01	.01	.02	.02	.18	.07	.26	-.08
やりたい仕事をするには何を勉強すればいいか分かった	-.03	.05	.08	.03	.11	-.01	.15	-.04
職業を選ぶ手がかりが得られた	.00	.12	.07	.03	.13	.06	.24	-.09
仕事をするのが何に役立つのか分かった	.03	.11	.06	.08	.10	.11	.19	.08
いろんな仕事の役割が分かった	.10	.03	.09	.02	.11	.04	.20	-.04
仕事でどんなふうに分類されるのか分かった	.04	-.01	.06	.05	.18	.01	.17	-.08
ある仕事に就くにはどんな勉強が必要か分かった	.06	-.01	.11	.04	.12	.02	.12	.00
自分の目標がはっきりしてきた	.01	.06	.00	-.02	.13	.10	.20	-.06
自分の関心のある仕事に就けるかどうか分かった	.11	.00	.05	.09	.17	.05	.29	-.09
職業についてもっと調べたくなった	.09	.00	-.01	.04	.07	-.02	.26	.00
仕事と世の中の関係が分かった	-.03	.02	.04	.13	.09	.10	.21	.06

** p<.01 統計的に有意に値が大きい箇所を太字網掛け下線で強調した。

図表2-16には、職業情報ツール使用後の感想と職業興味以外のその他のいろいろな職業志向との関連を示した。もっとも値の大きな相関係数が観察されたのは「職業をうまく選べそうな気がしてきた」と「人の役にたつために働きたい」との関連であり(ρ=.33)、以下「仕事の世界の広がり理解できた」と「人の役にたつために働きたい」(ρ=.30)、「興味がある職業と同じ仲間の職業が分かった」と「人の役にたつために働きたい」(ρ=.30)

と続いていた。概して高い相関係数がみられたのは「人の役に立つために働きたい」と「テレビをみていて仕事について知ることはありますか」であり、次いで「早く大人になって仕事をしてみたいと思いますか」「将来やってみたい仕事はきまっていますか」「やりたい仕事をするために働きたい」などで高い相関係数が観察された。これらの結果から、人の役に立つために働きたいとする対人志向の他、「早く仕事をしたい」「やってみたい仕事が決まっている」「やりたい仕事をやりたいとする」といった基本的な職業意識の高さが、ここで検討している職業情報提供型のキャリアガイダンスの効果をより良いものにするということが推測される。

図表2-16 職業情報ツール使用後の感想のその他の職業志向との関連(順位相関係数)

	早く大人になって仕事をしたいと思いますか	将来やってみたい仕事はきまっていますか	テレビをみていて仕事について知ることはありますか	両親から仕事の話は聞かれますか	大学に行き勉強したいですか	生活に必要なお金をもらうために働きたい	やりたい仕事をするために働きたい	人の役に立つために働きたい
仕事の世界に対するイメージができた	.14	.17	.19	.11	-.04	.01	.09	.13
いろいろな仕事がどのように関連しているかが分かった	.08	.13	.16	.01	.03	.04	.09	.23
ある仕事の作業内容が分かった	.12	.20	.39	.14	.04	-.02	.20	.29
自分の性格がより良く理解できた	-.07	.04	.22	.06	.03	.05	.08	.23
自分の性格とやりたい仕事があっているかどうか分かった	.04	.17	.23	.14	.07	-.05	.06	.20
職業をうまく選べそうな気がしてきた	.09	.14	.29	.11	.06	-.03	.19	.33
働くことの大切さが分かった	.17	.14	.15	.13	.04	.11	.07	.18
やりたい仕事についてより詳しく分かった	.19	.19	.21	.13	.08	-.15	.12	.20
どんな仕事グループがあるのか分かった	.09	.16	.16	.10	.05	.12	.04	.16
ある仕事に社会にどうして必要か分かった	.24	.25	.26	.18	.07	.02	.02	.23
自分の興味・関心をはっきりしてきた	.16	.24	.28	.21	.08	-.07	.18	.26
自分の興味とあった仕事分かった	.06	.20	.29	.08	.00	-.13	.21	.28
職業を選ぶ自信がついた	.14	.20	.24	-.03	.10	.07	.19	.27
職業の重要さが分かった	.22	.24	.15	.12	.09	.08	.10	.20
興味がある仕事に新たに増えた	.05	.05	.19	.02	-.04	.11	.21	.29
身近な職業を整理できた	.12	.05	.26	.03	.06	.07	.22	.20
ある仕事に就くにはどんな人が向くのか分かった	.06	.12	.28	-.05	-.01	-.02	.14	.22
自分の得意な分野(適性)をはっきりしてきた	.06	.10	.27	.12	.04	.03	.14	.25
やりたい仕事に自分が向いているかどうか分かった	.18	.23	.23	.13	.01	-.03	.09	.19
改めて将来の職業を考えてみる気になった	.04	-.11	.12	.02	.13	.22	.06	.11
何のために働くのか分かった	.19	.16	.19	.08	.02	.07	.15	.19
仕事の世界の広がり理解できた	.16	.17	.23	.15	.12	.06	.16	.30
興味がある職業と同じ仲間の職業が分かった	.12	.25	.24	.06	.08	.01	.20	.30
ある仕事でどんな人が働いているのか分かった	.20	.07	.22	.14	.05	.13	.14	.21
自分が大切に思うこと(価値観)をはっきりしてきた	.17	.23	.22	.14	.12	.08	.12	.25
やりたい仕事をするには何を勉強すればいいか分かった	.19	.17	.24	.06	.05	-.08	.09	.18
職業を選ぶ手がかりが得られた	.09	.05	.19	.04	.12	.02	.11	.24
仕事をするのが何に役立つのか分かった	.14	.10	.10	.14	.17	.07	.06	.19
いろいろな仕事の役割が分かった	.07	.10	.14	.11	.02	.11	.14	.24
仕事が多様なふうに分類されるのか分かった	.19	.11	.16	.12	.11	.09	-.01	.25
ある仕事に就くにはどんな勉強が必要か分かった	.14	.18	.29	.08	.01	-.01	.12	.22
自分の目標をはっきりしてきた	.20	.25	.25	.10	.03	-.05	.20	.28
自分の関心のある仕事に就けるかどうか分かった	.16	.26	.26	.09	-.04	-.05	.13	.29
職業についてもっと調べたくなった	.13	.18	.25	.01	-.01	.09	.14	.26
仕事と世の中の関係が分かった	.13	.20	.18	.06	.03	.08	.13	.22

** p<.01 統計的に有意に値が大きい箇所を太字網掛け下線で強調した。

(3) 職業情報ツール使用後の感想を規定する要因の多変量解析による検討

ここまで職業情報ツール使用後の感想を詳細に検討してきたが、ここからは、これらの結果を集約して職業情報ツール使用後の感想を規定する要因がどのようなものであるのかにつ

いて多変量解析の手法を用いて検討する。

まず、ここまで検討してきた職業情報ツール使用後の感想を測定する 35 項目は、もともと「職業理解」「職業構造の理解」「職業特性の理解」「自己理解」「職業と自分との関連について」「職業意識」「勤労観」の 7 つの側面を測定することを想定した質問項目であったため、内容的に類似した項目が含まれている。そこで、ここで改めて分析を行い、35 項目をいくつかのグループに分けることを目的として因子分析を行った。

図表 2-17 は、固有値 1.0 以上で最尤法プロマックス回転による因子分析の結果である。因子分析の結果、因子負荷量.30 以上の項目の意味内容に着目した。

図表 2-17 職業情報ツール使用後の感想の因子分析結果

	職業 理解	適性 理解	明確 化	手段	
何のために働くのが分かった	.86	-.16	-.11	.05	.11
仕事の世界の広がり理解できた	.76	-.03	-.06	.01	.14
ある仕事社会にどうして必要か分かった	.72	-.24	.29	.02	.06
仕事と世の中の関係が分かった	.70	.26	-.03	-.21	.04
ある仕事でどんな人が働いているのか分かった	.65	.11	.00	.08	-.06
いろんな仕事の役割が分かった	.57	.04	-.14	.21	.21
自分が大切に思うこと(価値観)がはっきりしてきた	.50	.15	.09	.11	.04
仕事がどんなふうに分類されるのか分かった	.48	.24	-.16	.28	.00
興味がある職業と同じ仲間の職業が分かった	.47	.23	.09	.12	-.29
職業の重要さが分かった	.39	.01	.24	-.03	.38
どんな仕事グループがあるのか分かった	.38	.01	.26	.10	.00
職業についてもっと調べたくなった	.37	.22	.11	.08	-.02
自分の得意な分野(適性)がはっきりしてきた	-.16	.97	.05	-.02	.02
改めて将来の職業を考えてみる気になった	.02	.66	-.09	.02	.16
やりたい仕事に自分が向いているかどうか分かった	.05	.52	.02	.24	-.06
自分の性格がより良く理解できた	-.03	.49	.37	-.15	.01
自分の性格とやりたい仕事があるかどうか分かった	.01	.41	.31	.10	-.07
興味がある仕事新たに増えた	.34	.40	.14	-.25	.07
身近な職業を整理できた	.35	.40	.12	-.20	.07
ある仕事に就くにはどんな人が向くのか分かった	.31	.36	.17	-.01	.00
職業をうまく選べそうな気がしてきた	-.21	.24	.77	.00	.21
自分の興味・関心がはっきりしてきた	-.05	.17	.71	.02	.01
自分の興味とあった仕事分かった	-.07	.33	.59	.01	-.06
職業を選ぶ自信がついた	.07	.11	.57	.07	.11
仕事の世界に対するイメージができた	.22	-.11	.50	.17	-.05
ある仕事の作業内容分かった	.00	-.09	.45	.42	.00
いろいろな仕事どのように関連しているかが分かった	.36	.07	.38	.02	-.08
やりたい仕事するには何を勉強すればいいか分かった	.06	-.08	-.01	.82	.02
ある仕事に就くにはどんな勉強が必要か分かった	.09	-.21	.14	.71	.11
職業を選ぶ手がかりが得られた	-.06	.28	.01	.64	.01
自分の目標がはっきりしてきた	-.16	.37	.22	.42	.01
自分の関心のある仕事に就けるかどうか分かった	.10	.34	.13	.36	-.07
やりたい仕事についてより詳しく分かった	.03	.13	.30	.32	.06
仕事をするのが何に役立つのか分かった	.32	.14	-.17	.28	.54
働くことの大切さが分かった	.27	-.01	.24	-.03	.52
回転後の負荷量平方和	13.3	12.1	12.1	11.0	2.9

※第 5 因子は因子負荷量の高い項目が 2 項目しかなく解釈が難しい因子だったため、後の分析から除外した。なお、参考のため、第 5 因子に負荷していた 2 項目を除いて因子分析した結果を、章末に示した。

その結果、第1因子では「何のために働くのかが分かった」「仕事の世界の広がり理解できた」などのように職業・仕事に関する理解が高まったとする項目が多かった。そこで第1因子を「職業理解」と解釈した。以下、第2因子は「自分の得意な分野（適性）がはっきりした」「改めて将来の職業を考えてみる気になった」など自分の適性や興味に関する項目が多かったので「適性理解」と解釈した。第3因子は「職業をうまく選べそうな気がしてきた」「自分の興味・関心がはっきりしてきた」など、職業選択に対する明確さや自信が増したことに係る項目が多かったので「明確化」と解釈した。第4因子は「やりたい仕事をするには何を勉強すればいいか分かった」「ある仕事に就くにはどんな勉強が必要か分かった」など、進路選択・職業選択の手段や方法に関する理解に関する項目が多かったので「手段」と解釈した。最後に第5因子は因子負荷量が.30以上の高い項目が2項目しかなく解釈が困難であったため、後の分析から除外した。以上、図表2-17の因子分析結果に基づいて、第1因子から第4因子までをそれぞれ「職業理解」「適性理解」「明確化」「手段」と解釈した。

次に、これら「職業理解」「適性理解」「明確化」「手段」の因子得点を求め、各因子得点に影響を与える要因を特定するための分析を行った。具体的には、各因子得点を被説明変数とし、ここまで扱ってきた性別、得意科目、職業興味、その他の職業志向などの各要因を説明変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。

図表2-18は重回帰分析の結果である。図表から、職業情報ツールを使用した後の感想に肯定的な影響を与える変数として、全ての因子得点に影響を与えた「テレビをみていて仕事について知ることはありますか」と「人の役に立つために働きたい」があることが示された。すなわち、もともとテレビから仕事に関する情報を得るタイプの生徒、および人の役にたつために働きたいと考える生徒である場合、「職業理解」「適性理解」「明確化」「手段」のどのような側面でも職業情報ツールの効果が良いものとなることがうかがえる結果となった。

その他、「いろいろな人と接する仕事がしたい」と考えるか否かも「職業理解」「適性理解」「明確化」に影響を与える変数として大きな影響のある変数であった。特に「適性理解」「明確化」に対する標準偏回帰係数はどちらも.30を超えており、対人志向的な職業興味をもっていることが職業情報ツール使用後の特に「適性理解」や「明確化」といった面にポジティブな影響を与えることがうかがえる結果となった。

また、「早く大人になって仕事をしたいと思いますか」「ものを作ったり組み立てる仕事がしたい」という項目も、それぞれ「職業理解」「手段」、「適性理解」「明確化」に影響を与えていた。早く大人になって仕事をしたいという職業意識の高さ、もの作り志向の高さが良い影響を与えることがうかがえる。

なお、「性別」「(得意科目)数学」なども影響を与えていた。本章のここまでの分析の結果では、広範に性別の影響が推測される結果となっていたが、重回帰分析の結果では性別は「手段」にのみ影響を与えており、他の側面には影響を与えていなかった。この結果から

は、本章で一貫して観察されてきた性別の違いは、むしろ図表2-15で大きな影響力をもっている「テレビをみていて仕事について知ることはありますか」や「人の役に立つために働きたい」などの要因による違いであり、概して言えば、メディア志向、対人志向などが職業情報に対する反応に影響を与えていた。

数学が得意科目であることの影響については解釈が難しく、今後の検討を要する。

図表2-18 職業情報ツール使用後の感想の因子得点に影響を与える要因
(ステップワイズ法による重回帰分析)

	職業 理解	適性 理解	明確 化	手段
テレビをみていて仕事について知ることはありますか	.20 *	.18 *	.27 **	.20 *
人の役にたつために働きたい	.19 *	.18 *	.17 *	.16 *
いろいろな人と接する仕事がしたい	.17 *	.31 **	.32 **	
早く大人になって仕事をしたいと思いますか	.16 *			.18 *
ものを作ったり組み立てる仕事がしたい		.15 *	.15 *	
性別(1=男性、2=女性)				.24 **
【得意科目】数学				.19 *
調整済みR ²	.19 **	.23 **	.29 **	.21 **

※数字は標準偏回帰係数。 ** p<.01 * p<.05

5. 職業情報ツール使用前後の進路課題に対する自信の変化に関する分析

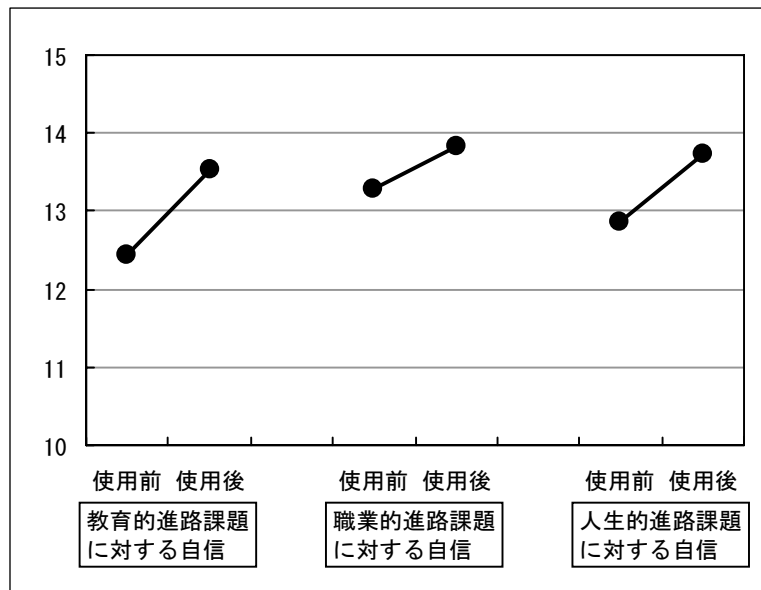
このデータでは、職業ハンドブックOHBY使用前後で坂柳・清水(1990)によって作成された進路課題に対する達成の自信度を測定する尺度(進路課題自信尺度)12項目を生徒にたずねた。この尺度は、進学などの内容を含む「教育的進路課題自信度」、就職や職業決定などの内容を含む「職業的進路課題自信度」、人生や生き方などの内容を含む「人生的進路課題自信度」の3つの側面からなっている。この3つの側面を、以下、本章では「進学」に対する自信、「就職」に対する自信、「人生」に対する自信と表記することとする。

このデータでは、職業ハンドブックOHBYの使用前後で進路課題自信尺度が変化することが示されている。基本的には、職業ハンドブックOHBYの使用後の方が使用前よりも値が大きく、「教育的」「職業的」「人生的」のどの進路課題に対する自信も高くなっていた。

しかし、図表2-19の結果では、おおむね職業情報ツールの使用後に進学・就職・人生に対する自信が高まるということと言えるが、なぜそのようなことが生じるのかというプロセスが不明のまま残されている。

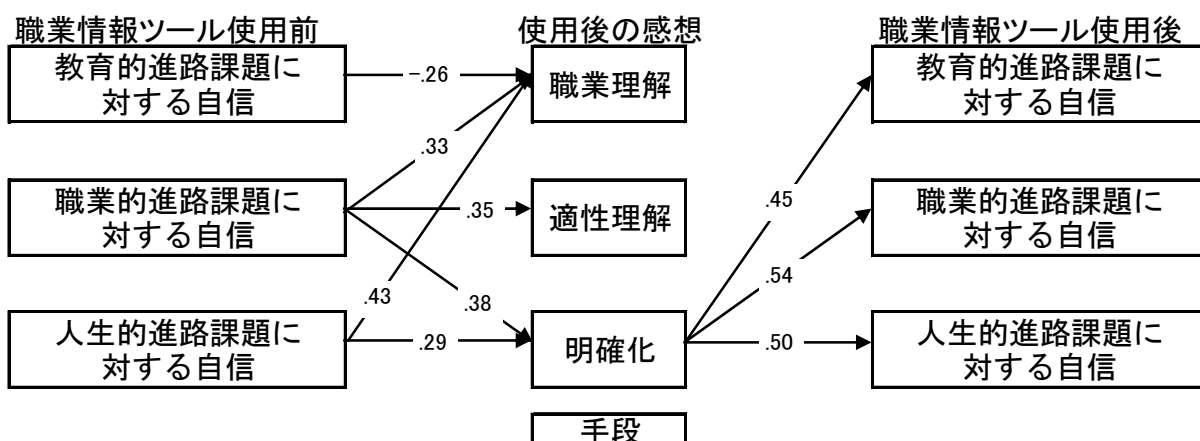
本節では、この職業情報ツール使用後に自信が高まるプロセスを分析するにあたって、前節まで検討してきた職業情報ツールに対する感想が手がかりを与えるものと考えた。そこで、「職業情報ツール使用前の進路課題に対する自信」→「使用後の感想」→「職業情報ツール使用後の進路課題に対する自信」をプロセスモデルとするパス解析を行った。パス解析にあたっては重回帰分析を用い、モデル上で先行する要因を説明変数を一括投入した。

図表2-19 職業情報ツール使用前後の進路課題自信尺度の平均値の違い



図表2-20は、パス解析の結果である。図表では、統計的に有意なパスを掲載した。したがって、有意でないパスは省略されている。なお、パスが結ばれている箇所は矢印元から矢印先に向けて影響関係があると解釈することができる。

図表2-20 職業情報ツール使用前後の進路課題自信尺度の変化に関するパス解析



※数値は標準偏回帰係数(β)。5%水準で有意なパスを表記した。したがって、有意でないものは省略されている。

この図表から、職業情報ツール使用前の自信は使用後の感想に複雑に影響を与えており、事前のそもそもの自信の程度が職業情報ツール使用後の感じ方に関わっていることが示された。まず、職業的進路課題に対する自信は「職業理解(β=.33)」「適性理解(β=.35)」「明確化(β=.38)」の3つの使用後の感想に影響を与えていた。事前に就職に対する自信が高いことが職業情報ツール使用に良い影響を与えており、そのことが使用後の良い感想に結びつ

いていたことが推測される。次に、人生的進路課題に対する自信は「職業理解($\beta=.43$)」「明確化($\beta=.29$)」の2つの使用後の感想に影響を与えていた。人生全般に対する自信も職業情報ツール使用およびその後の感想に良い影響を与えることが示された。

考察すべき点としては、図表2-20で教育的進路課題に対する自信が「職業理解($\beta=-.26$)」に負の影響を与えることである。これは事前に進学に対する自信が高い生徒では、職業情報ツール使用後に特に「職業理解」の面で十分でないという感想を抱くという結果を示すものである。この結果については、以下の複数の解釈を行うことができ、今後、十分な検討を要する。第一に、進学に対する自信が高い生徒は、既に特定の進路を決めており、それに向けた進学準備を着実に進めている生徒であり、そうした生徒にとっては中高生向けの職業情報ツールだけでは「職業理解」が不十分であり、より高度で専門的な職業情報を求めているという可能性が考えられる。第二に、こうした生徒は、特定の職業希望に固執している場合があり、その職業が職業情報ツールに含まれていない場合にも自分が希望する職業について十分な職業情報が得られなかったという感想を抱きやすい可能性もある。これらの解釈からは、中学生にとって直近の進路課題である「進学」に向けた意識が特定の職業に固着しすぎることのデメリットもうかがえる。しかし、上述の2つの解釈以外の可能性もあり、本研究の結果だけでは明確な考察ができない。そのため、こうした結果が生じる理由を明らかにするには、今後、継続して検討する必要があると思われる。

図表2-17では、最終的に職業情報ツール使用後の進路課題自信尺度の値に影響を及ぼしたのは、職業情報ツール使用後の感想の「明確化」のみであった（明確化→教育的 $\beta=.45$ ；明確化→職業的 $\beta=.54$ ；明確化→人生的 $\beta=.50$ ）という点も、極めて重要な結果である。

使用後の感想「明確化」因子は、「職業をうまく選べそうな気がしてきた」「自分の興味・関心がはっきりしてきた」など、職業選択に対する明確さが増したことに関する項目の他、「職業を選ぶ自信がついた」といった自信に関する項目からも構成されていた（図表2-17参照）。こうした因子分析結果をふまえて解釈すると、職業情報ツールを活用することによって、何らかの意味で職業意識の明確化が生じ、結果的に職業を選ぶ自信が得られたことが、職業情報ツール使用後の自信の高さに直接結びついていることが考えられる。

整理すると、職業情報ツール使用後の自信の高さには、職業情報ツールを使用して、職業に関する明確なイメージをもち自信を持つことができたということが、特に重要になるものと思われる。

なお、図表2-20の追加分析として、職業情報ツール使用前後の進路自信尺度の変化に関する重回帰分析を行った。具体的には、職業情報ツール使用前後の各自信尺度得点の点差を求めて被説明変数とし、図表2-20に挙げた使用後の感想「職業理解」「適性理解」「明確化」「手段」を説明変数とする重回帰分析を行った。その結果、図表2-21の上表に示した結果となった。図表2-20のパス解析とかなり異なる結果となっているが、具体的には、職業的進路課題に対する自信の変化は「手段($\beta=.38$)」に統計的に有意な影響を受け

ていた。同様に、人生的進路課題に対する自信の変化は「職業理解 ($\beta = -.35$)」に統計的に有意な影響を受けていた。これらの結果は、①職業情報ツールの活用により、特定の職業に就くに至る手段について知ることができたという感想を得られた場合に職業選択に対する自信が高まる、②一方で、特定の職業に関する理解が得られた場合には人生全体に対する自信が低まるというものであり、前者の結果は一応首肯できるものであるとしても、後者の結果は解釈が難しい。

こうした重回帰分析の背景を探るために、図表2-21の下表では、より単純な分析である相関係数の値を示した。その結果、職業情報ツール使用後の感想はいずれも教育的進路課題に対する自信の変化と関連が深いことが示された。これは、職業情報ツール使用後の感想が良ければ、概して、中学生にとって直近の進路課題である進学先の選択に対する自信が高まるというものであり、いわば常識的な結果となっている。

図表2-21 職業情報ツール使用前後の進路課題自信尺度の変化に関する
重回帰分析(上表)および相関係数(下表)

重回帰分析			
	教育的 進路課題に 対する自信	職業的 進路課題に 対する自信	人生的 進路課題に 対する自信
職業理解	.19	-.21	<u>-.35</u>
適性理解	.00	-.15	-.01
明確化	-.03	-.05	.08
手段	.10	<u>.38</u>	.20
調整済みR ²	<u>.06</u>	<u>.06</u>	<u>.05</u>
相関係数			
	教育的 進路課題に 対する自信	職業的 進路課題に 対する自信	人生的 進路課題に 対する自信
職業理解	<u>.24</u>	-.07	-.16
適性理解	<u>.17</u>	-.08	-.06
明確化	<u>.16</u>	-.07	-.04
手段	<u>.21</u>	.08	-.01

※太字下線は5%水準で有意

こうして図表2-20および図表2-21の結果を総合すると、パス解析、重回帰分析、相関係数といった比較的類似した面のある分析結果でも、かなり相違のある結果が得られることが分かる。こうした場合、相互に異なる結果の背景に、各変数間の複雑な関連性およびそこに影響を与える複雑な個人差変数の影響が想定される。実際、図表2-18で、使用後の感想に影響を与える要因を分析した結果でも、その背後に複雑な影響関係が推測される結果となっており、単純な解釈を許さない面がある。

これら分析結果をまとめて解釈するとすれば、総じて言えば、職業情報ツールの使用は、ツール使用後の自信の程度または変化の程度のいずれの面からの分析でも、一部の例外を除

けば、総じて良い影響を与えるが、その影響のあり方は一様ではなく、職業情報ツールの使用方法およびその背景にある個人差に十分に留意する必要があるということが言える。特に、本節の結果からは、職業情報ツールのみでキャリア形成支援を行おうと考えるべきでなく、その他、テストや様々な職業体験など多様な取り組みを含めた総合的かつシステムチックなアプローチが必要になると考えるべきであるとする示唆が引き出せる。なお、ここでの分析結果では、第6章で職場体験学習について詳しく分析した結果から得られた「現実化（平準化）効果」も関連している可能性があるため、そちらも参照していただきたい。

6. 本章のまとめと示唆

(1) 本章の結果のまとめ

本章では以下の結果が示された。

①中高生が将来の職業について話す相手は、両親または友達という身近な存在であった。ただし、約2割弱の中高生が将来の職業について誰とも話し合っていないかった。

②中高生が具体的な職業について知る機会は、テレビや雑誌・本などの情報媒体、友達・親などの身近な人、学校の授業などであった。学年があがるにつれて、将来の職業について話す相手として、両親・友達・先生の割合は高まる一方、「特に誰とも話し合わない」割合は低くなっていた。また、学年があがるにつれて、具体的な職業について知る機会として、「テレビをみているとき」という回答する割合は少なくなり、先生・先輩・友達と話しているときと回答する割合が多くなった。

③中高生ともに進路が「未定」の者は、概して人と話しあう割合が低く、「特に誰とも話し合わない」の割合が高かった。

④職業ハンドブックOHB Yのような職業情報ツールと接した際の中学生の反応は、「職業が分かった」「面白かった」「職業に就く方法が分かった」「やりたくなった」などポジティブな捉え方が中心である一方、「仕事は大変だと思った」「職業に就くのは難しい」「仕事は大変そう」「がんばらないといけないと思った」といったネガティブな回答も見られた。

⑤職業情報ツールに接した後の反応は概して女子の方が良いが、多変量解析による結果では、(ア)テレビをみて仕事を知ることがある、(イ)人の役に立つために働きたい、(ウ)人と接する仕事がしたいなど、テレビなどのメディア志向、対人志向などが職業情報に対する反応に影響を与えていた。

⑥職業情報ツールを使用した後の進路課題に対する自信の高さは、職業情報ツールを使用することによって何らかの意味で職業意識における明確化が生じ、それによって得られた自信が汎化する形でもらされる可能性が示された。

(2) 本章の結果からの示唆

本章の結果から、学校段階のキャリア形成支援における「情報」全般に対して得られる示

唆を、以下に3つの点に整理して述べる。

第一に、中高生の職業情報の入手先は、両親や友人などの身近な存在、テレビや雑誌などの情報媒体が中心であることが示された。基本的には身近な存在やマスメディアは貴重な職業情報源として重要なものであるが、一方で、それだけでは十分な職業情報が得られない場合や偏った情報・不正確な情報が伝えられる場合も想定される。改めて学校段階のキャリア形成支援の場面で、必要十分な職業情報については適切な形で伝えられるのが望ましいと言えるであろう。なお、将来の進路が未定であるとする生徒では、将来の職業について両親や先生と話をすると回答した割合が低く、「特に誰とも話し合わない」と回答した割合が多かった。進路未定である生徒が進路について誰とも話をせず、そのためによりいっそう進路決定に向けて動き出しにくくなるという悪循環が推測される結果であり、この点でも、学校段階のキャリア形成支援の場面でより適切な介入が必要となる。

第二に、本章で検討した職業ハンドブックOHBYのような職業情報ツールと接した際の中学生の反応は基本的にはポジティブなものであり、将来に向けて適切な動機づけを与えるものであると評価することができる。特に、事前に職業世界について十分な情報をもっていない生徒にとって、手元のパソコンを操作することによって、絵や写真、文章など様々な形で職業情報に接することの効果は、本章の結果でも明らかに観察された。ただし、一方で、職業情報ツールでは、生徒が希望する職業の実像が示されるため、生徒が事前に抱いていた職業イメージと必ずしも合致するばかりではない。また、具体的にその職業に至るまでのプロセスも示されるが、生徒が想像していたよりも厳しい過程である場合もある。そのため、職業情報ツールに対する生徒の受け止め方は、必ずしもポジティブなものとはばかりは限らず、ネガティブなものとなる場合もある。この点について、本章では、職業情報ツールは一般的に考えられているよりも、より生徒の職業や進路に対する考え方をリアルなものにするという点を重視するべきであるということが示唆される。職業情報ツールなどによって、より客観的な形で職業の実像を伝えることにより、一時的にツール活用後の生徒の進路意識がネガティブなものになるとしても、そのことは職業生活に対する生徒のよりリアルな認識を作り上げることに繋がるものとして、良い契機として考えるべきであろうと思われる。

第三に、職業情報ツールは、上述した職業世界のリアルなあり様を生徒に知らせるという効果の他に、もう1つ、擬似的に様々な形で将来の進路選択の具体的なイメージを示すということがあるように思われる。本章の結果では、職業情報ツール使用後の進路選択全般に対する自信の高さは、職業情報ツールを使用したことによって何らかの意味で自信をつけるといった感想を抱いたか否かによっていた。つまり、職業情報ツールによって、様々な職業情報に触れ、その中で将来その職業に自分が就いたとしたらどういう職業生活を送るのか、また、それに向かってどのような準備をすれば良いのかを知った際、そこで自分にもやれるという自信を得るか否かが、その後の進路意識全般に影響を与えるようであった。職業情報ツール上で自分が現在考えているプランでうまくいきそうだという感覚をつかむことによっ

て、模擬的に将来の進路選択を行い、先を見通すことができるということが、究極的には職業情報ツールの機能であると言えるであろう。上述したとおり、逆にかえって自信を失ってしまう場合も当然考えられるが、現実の進路選択の前にツール上でそうした経験しておくことは、生徒が将来を考える上で必要なプロセスとして、後のキャリア形成支援に良い形で活かしていくことができるであろう。

以上、本章では、学校段階のキャリア形成支援における「情報」について検討を行った。その結果、学校段階のキャリア形成支援では情報に関する指導が不可欠となること、また、その指導にあたって、職業情報ツールの活用が有効であること、さらにその活用方法にも一定の方向性があることを示すことができたと思われる。ただし、本章の特に第1節の調査結果は、比較的、以前のものとなっている。調査結果からは、おおむね社会的な状況変化によって変化しないある程度普遍的な内容の知見が得られたと考えるが、実際に、中高生の職業情報入手の実態が当時と比較して変化がないか否かについては、今後の検討課題とすべきである。継続的な基礎研究が必要となる所以である。

【引用文献】

- 川崎友嗣・下村英雄 2001 職業ハンドブック中高生版の評価－教育現場における検証－
日本進路指導学会第23回大会発表論文集 52-53.
- 坂柳恒夫・清水和秋 1990 中学生の進路課題自信度と性役割自己概念との関連 進路指導
研究, 11, 18-27.
- 下村英雄・吉田修・石井徹 2002 職業理解とコンピュータ・ガイダンス・システム－実践
場面における効果 日本進路指導学会第24回大会発表論文集 104-105.

○章末資料 図表 2-17 の追加分析 (第5因子に負荷した2項目を除いた因子分析結果)

	職業 理解	適性 理解	明確 化	手段
何のために働くのかが分かった	.89	-.16	-.13	.08
仕事の世界の広がり理解できた	.80	-.05	-.02	.02
ある仕事社会にどうして必要か分かった	.70	-.16	.19	.09
仕事と世の中の関係が分かった	.69	.30	-.04	-.20
いろんな仕事の役割が分かった	.66	-.01	-.10	.20
職業の重要さが分かった	.58	-.13	.30	.01
ある仕事でどんな人が働いているのか分かった	.57	.19	-.04	.09
自分が大切に思うこと(価値観)がはっきりしてきた	.50	.17	.08	.11
仕事がどんなふうに分類されるのか分かった	.43	.36	-.23	.29
身近な職業を整理できた	.40	.31	.20	-.21
どんな仕事グループがあるのか分かった	.38	.03	.20	.15
興味がある仕事新たに増えた	.36	.34	.20	-.27
職業についてもっと調べたくなった	.33	.30	.05	.10
自分の得意な分野(適性)がはっきりしてきた	-.15	.88	.16	-.08
やりたい仕事に自分が向いているかどうか分かった	-.06	.67	-.06	.24
改めて将来の職業を考えてみる気になった	.08	.62	-.03	-.02
自分の性格がより良く理解できた	-.05	.49	.38	-.16
自分の性格とやりたい仕事があっているかどうか分かった	-.04	.46	.29	.09
自分の関心のある仕事に就けるかどうか分かった	.04	.45	.06	.36
興味がある職業と同じ仲間の職業が分かった	.27	.39	.02	.11
ある仕事に就くにはどんな人が向くのか分かった	.30	.38	.16	-.01
職業をうまく選べそうな気がしてきた	-.06	.11	.80	.02
自分の興味・関心がはっきりしてきた	-.05	.12	.75	.03
自分の興味とあった仕事分かった	-.09	.27	.66	.00
職業を選ぶ自信がついた	.14	.01	.63	.08
仕事の世界に対するイメージができた	.21	-.10	.45	.21
いろいろな仕事どのように関連しているかが分かった	.30	.14	.33	.04
やりたい仕事するには何を勉強すればいいか分かった	.08	-.04	-.06	.80
ある仕事に就くにはどんな勉強が必要か分かった	.15	-.18	.06	.74
職業を選ぶ手がかりが得られた	-.04	.30	.02	.59
ある仕事の作業内容が分かった	.02	-.08	.40	.45
自分の目標がはっきりしてきた	-.16	.38	.22	.40
やりたい仕事についてより詳しく分かった	.07	.12	.27	.34
回転後の負荷量平方和	15.3	1.6	1.0	0.7